

【研究論文】

ケベックのアジア系女性文学と「間文化主義」：
キム・チュイの作品を中心に

Les écrits des migrantes d'origine asiatique au Québec :
Une analyse de l'interculturalisme chez Kim Thúy

山出裕子
YAMADE Yuko

Résumé

Dès les années 1980, le gouvernement du Canada n'a cessé de promouvoir une politique culturelle appelée « multiculturalisme », tandis qu'au Québec, cette politique s'est vue définir dans les années 1990 par le mot d'« interculturalisme ». L'interculturalisme québécois a pour but de favoriser le partage de la culture française, ou plus précisément, québécoise, entre les migrants de diverses origines ethniques, et ainsi de fonder là-dessus une nouvelle culture québécoise. Cela semble avoir marqué les productions littéraires québécoises postérieures aux années 1990.

Or, au cours des années 1990, un certain nombre de nouvelles migrantes au Québec, venant d'Asie en particulier, ont commencé à écrire des œuvres romanesques et poétiques en français. Parmi celles-ci, nous pouvons citer d'abord Ying Chen d'origine chinoise, qui a publié ses premiers romans tout au début des années 1990. Quelques années plus tard, à la fin de la même décennie, parut le premier roman d'Aki Shimazaki, migrante au Québec d'origine japonaise, écrivant également en français. Au cours de la décennie suivante, nous avons vu paraître le premier roman autobiographique de Kim Thúy, migrante d'origine vietnamienne. Dans ces années-là, une nouvelle littérature dite migrante commençait à former un genre à part dans le monde des lettres québécois, et les éditeurs en recevaient des textes généralement avec une attitude très favorable. En outre, nous pensons pouvoir retrouver dans les textes de ces écrivaines un certain nombre de nouvelles caractéristiques. Ces caractéristiques semblent témoigner un regard nouveau sur la société et la culture québécoises.

Nous voudrions dans cet article proposer à caractériser ce nouveau corpus littéraire créé par des migrantes d'origine asiatique au Québec depuis les années 1990, en y analysant un regard d'auteure étrangère qui nous semble être un reflet de l'époque où l'interculturalisme commençait à apporter ses premiers fruits à la littérature.

キーワード：ケベック文学、移民文学、アジア系、間文化主義、フランス語圏（フランコフォニー）

Mots-clés : littérature québécoise, écrits migrants, origine asiatique, interculturalisme, francophonie

1. はじめに

近年、アジア系作家の作品が様々な文化圏の文学において論じられている。これは、1980年代以降、ポストコロニアル文学が盛んに論じられ、エスニック・マイノリティの文学が注目されるようになったことがその背景にある。例えば、英語とフランス語を公用語とするカナダでも、1980年代から英系、フランス系の両方の文学において「アジア系文学」が見られる。これは「ポストコロニアル文学」はもとより、この年代にカナダ連邦政府により掲げられた「多文化主義」(Multiculturalisme) やケベックの文化的特徴を論じる際に近年用いられる「間文化主義」(Interculturalisme) によるところもまた大きい。特にケベック文学では、昨今盛んになりつつあるアジア系文学の中に「間文化主義」の特徴の一つである「ケベック元来のフランス系文化の他文化との共有」が実践されている様が描かれている。

本論では、北米や欧州における「アジア系文学」の現状と動向を概観した上で、ケベックのアジア系女性文学を検討したい。さらに、ケベックのアジア系女性文学の中でも、近年とりわけ注目されるベトナム系作家キム・チュイ (Kim Thúy) の作品を例に、そこに読み取りうるケベック文学の特徴を明らかにしたい。

2. 近年のアジア系文学の動向

まずはじめに、北米と欧州におけるアジア系文学の現状と動向を、それぞれアメリカとフランスを中心に概観したい。

2.1. アジア系アメリカ文学

1980年代以降、ポストコロニアル理論が盛んになり、アメリカ文学ではアジア系文学が1つのジャンルとして注目された。例えば、1980年に出版されたエレイン・キム (Elain Kim) の *Asian American Literature: An Introduction to the Writing and Their Social Context* では、中国系、日系、フィリピン系、朝鮮・韓国系の4つのエスニック・グループの文学に描かれるアジア系アメリカ人のアメリカ体験が、社会史に照らして明らかにされている。さらに1990年に入ると、ベトナム系作家の作品が出版され始め、1995年には最初のベトナム系アメリカ文学のアンソロジー *Once Upon a Dream* が出版された。また、1997年に出版されたラン・カオ (Lan Kao) の『モンキーブリッジ』 (*Monkey Bridge*) は、ベトナム戦争後にアメリカへ渡ったベトナム系女性の人生を綴った作品であり、大きな注目を浴びた。2000年以降には、ベトナム系アメリカ文学の出版が相次ぐようになり、これらの一連のベトナム系アメリカ文学作品については、イザベル・チュイ＝ペロウド (Isabelle Thuy Pelaud) の *This is all i choose to tell: History and Hybridity in Vietnamese American Literature* で詳しい紹介がなされている¹。これらのアジア系アメリカ文学の一面となったベトナム系アメリカ文学では、ベトナム戦争後、アメリカなどで人生を始めたベトナム系の主人公たちが、母国から離れた国でのベトナム系コミュニティとのつながりから、ベトナム系のアイデンティティを確立していくさまが描かれている。

2.2. フランスのアジア系文学

フランス語によるアジア系文学もまた、近年、中国系やベトナム系を中心に多くなっている。例えば、1972年に北京に生まれたシャン・サ (Shan Sa) は、フランスへ渡り、フランス語で作品を書き始めた。1993年に発表した『天安門』 (*Porte de la paix céleste*) で、フランスでも最も権威のある文学賞の1つであるゴンクール賞の最優秀新人賞を受賞したほか、2001年に発表した『碁を打つ女』 (*La Joueuse de Go*) では、高校生の選ぶゴンクール賞を受賞した。2011年にはフランスの文化勲章に当たる *Ordre national du Mérite* を受賞した。

英語文化圏におけるアジア系文学では、1990年代以降からベトナム系作家の作品が出版されているが、フランス語文化圏におけるベトナム系文学はそれに先駆けており、研究も数多いことは見逃されがちである。これは、ベ

トナム戦争後の1970年代からフランス語文化圏（特にフランス本国や北米のケベックなど）へのベトナム系移民が急増したことがその背景にあるといえる。また、1980年代からベトナム系作家の作品が存在していたことに鑑みると、ベトナム戦争当時の状況を伝える文学作品を出版することを可能ならしめた社会的背景が、すでに当時のフランスやカナダ社会にはあったことをうかがい知ることができる。この時期のベトナム系フランス語文学については、特にジャック・イーガー（Jack A. Yeager）の *The Vietnamese Novel in French* (1987) などにおいて、詳しい分析がされており、それ以降もベトナム系作家によるフランス語作品は数多く出版されている。例えば、フランスのベトナム系女性作家としては、キム・ルフェーブ（Kim Lefèvre）とリンダ・レ（Linda Lê）が代表的である。ルフェーブは、1939年に北ベトナムのハノイに生まれ、1959年にフランスに移民しパリに定住し、翻訳家として活躍した。その後、1989年に第1作となる『白いメティス』（*Métisse blanche*）、1990年に第2作となる『雨季への帰還』（*Retour à la saison des pluies*）を発表しており、これらはいずれも自伝的作品とされる。1994年には、第3作であり、初の小説である『私は、マリナ・ラ・マリンチュ』（*Moi, Marina la Malinche*）を出版した。一方のリンダ・レは、1963年に北ベトナムの裕福な家庭に生まれ、1977年に家族とともにフランスに移民した。1981年にパリに移り、パリ第4大学に進学した後、1986年に最初の小説『優しいヴァンパイヤ』（*Un si tendre vampire*）をフランス語で発表した。1997年に発表した第7作『三人のバルカ』（*Les Trois Parques*）で Prix Fénéon を受賞し、2010年には第18作目となる『クロノス』（*Cronos*）を出版し、同作で Prix Wepler を受賞した。リンダ・レは、自伝的作品に限らず、さまざまなジャンルの作品を発表しており、アジア系やベトナム系という枠組みを越えた活躍を見せ、2000年代以降も注目されている。また、フランスにおけるベトナム系文学研究に関しては、2003年にはナタリー・グエン（Nathalie Huynh Chau Nguyen）の *Vietnamese Voices: Gender and Cultural Identity in the Vietnamese Francophone Novel* (2003) が出版されている。これは、ジャック・イーガーの研究以降のベトナム系フランス語作家の作品について紹介したものである。このように、フランスにおいてベトナム系作家に関する研究書が英語圏に比べて、早い時期からそして数多く見られていることは、その歴史的、社会的背景の違いに起因したものであると言えるであろう。

3. アジア系ケベック文学

3.1. 「多文化主義」と「間文化主義」

北米文化圏に位置するカナダは、「多文化主義」を連邦政府の文化政策として掲げる。それが英語、フランス語という2言語に基づくものであることが、カナダの文化に1つの大きな特徴を創り出している。特にカナダのフランス系文化は、歴史的、社会的背景から、英系文化とは異なる発展を遂げてきており、このことはカナダの文化に独自の特徴を持たせることを可能ならしめている。さらに、カナダのフランス系文化の中心であるケベック州では、近年「多文化主義」よりも、エスニシティを中心に捉えた「多民族性」(Pluriethnicité) やさらにハイブリッドな文化の創造に重点を置いた「間文化主義」という概念がより好まれる傾向にある。「間文化主義」については、例えば、ケベックの歴史社会学者であるジェラルド・ブッシュャール (Gérard Bouchard) によって、次のように説明される。

間文化主義とは(最近のまたは以前からの)移民による文化的違いを調和させる以上のことを目的としている。その目的は、我々の社会全体の融和である。それゆえ、この概念はケベックの人々の交流、相互作用、歩み寄り、それに対する責任感を持つことを奨励するものである²。

つまり、この概念は、ケベック元来の民族であるフランス系の文化とその他の民族の持つ文化との交流に注目するものであり、連邦政府の文化政策とは一線を画した多文化、多民族社会に対するケベックの独自の態度を表したものである。こうした、ケベックの多(他)文化に対する独自の態度は、近年のケベック文学において、多様な文化背景を持った作家たちが国内外の文学賞を受賞するなど、エスニック・マイノリティの活躍の場を生み出す要素となっている。

3.2. ケベックの「新」移民文学

ケベック文学では、1980年代以降、フランス系、英系以外のエスニック・グループ出身の移民女性による作品が数多く見られる。特に1980年代には、アラブ系作家の作品が注目を集め、その後、1990年代に入るとケベックの批評家であり、かつ移民作家でもあるレジヌ・ロバンが「新」ケベック人と呼ぶような、アジア系移民たちの作品が見られるようになった³。

例えば、1990年代の初めには中国系のイン・チェン（Ying Chen）が作品を発表し始め、この年代の後半には日系のアキ・シマザキ（Aki Shimazaki）がフランス語の作品を発表している。さらに2000年代に入るとベトナム系のキム・チュイが作品を発表し、ケベックのみならずカナダの国内外でも高く評価されている。

カナダの英系文学では、1980年代に「多文化主義法」が制定された頃から、様々な民族的背景を持つ作家たちの作品が現れた。しかし、いまだにベトナム系作家の作品は見られていない。一方で、ケベック文学で、近年、ベトナム系文学が注目されているのは、フランスにおけるベトナム系文学がアメリカにおけるベトナム系文学に先駆けて発表され、すでに多くの研究がされてきたことと無関係ではないであろう。つまり、ベトナム戦争後にフランス語圏へ大量のベトナム系移民が押し寄せ、その後、フランス語圏において新たな生活を始めたベトナム系移民たちにとって、フランス語文化圏とは、彼らの歴史や生き立ちを語るための土壌が英語圏に比べ比較的早く備わっていたことがその背景にあると言える。さらに、ケベックにおけるベトナム系作家の活躍の背景には、英系カナダの推し進める、それぞれの民族が独自の文化を保つことにより1つの社会を形成する「多文化主義」と、ケベックの目指す移民たちの役割を重視しながら、様々な民族が互いに文化を分かち合う「間文化主義」が作り出す社会的、文化的背景の違いもあったといえるであろう。

3.3. ベトナム系ケベック文学

ケベックのベトナム系作家としては、まず、1990年代から作品を発表しているバック・マイ（Bach Mai）が挙げられる。バック・マイは、ベトナムのサイゴン（現在のホーチミン市）に生まれ、ベルギーで学んだ後、ケベックへ渡った。そして、カナダの放送局である「ラジオ・カナダ」のジャーナリストとして働いた後、文学作品を描き始めた。1990年代に発表された処女作『象牙と阿片』（*D'ivoire et d'opium*）は、ドキュメンタリー小説（Roman documentaire）とされ、フィクションとされる作品の中に、多くの写真が挿入されている点に特徴がある。それらの写真の中には、バック・マイ自身や彼女が当時働いていた「ラジオ・カナダ」の同僚との写真も多数見られる。こうした、フィクションとノンフィクションの要素を並立させ、真実と虚構の境目を曖昧にさせる作風は、この時代の文学にしばしばみられた。

2000年代に入って発表された、バック・マイの第二作『昨日、まだ、サイゴン』(*Hier encore Saigon*)は、ベトナムを離れカナダへ移住した主人公が再びベトナムへ戻り、過去の記憶の再生を通して、アイデンティティを再構築する様を描いている。こうして、祖国であるベトナムを離れた後、再びベトナムを訪れることによりアイデンティティを構築していく様は、フランスに移民し、作品を制作する前出のキム・ルフェーブルの作品と同様である。このような、ベトナム出身の女性作家の作品で描かれる「ベトナムへの帰還」の特徴について、スリラタ・ラビ (Srilata Ravi) は、ジュリア・クリステヴァ (Julia Kristeva) の「前エディプス理論」(Pre-Oedipal)になぞらえながら、「自我の源／母 (Source/Mother) への帰属は、アイデンティティ (Home/Foyer) を定義し、民族的、文化的混血性を認識するための行為」(Ravi, 2002, p.42) であるとしている。つまり、バック・マイの『昨日、まだ、サイゴン』では、キム・ルフェーブルの『雨季への帰還』の主人公と同様、ケベックやフランスのホスト文化においてアイデンティティを構築することができず、母国 (Source/Mother) へ帰還し、ベトナム人というアイデンティティを否定するのではなく、再認識することによって生を始める主人公の姿が描かれるのである。このように、アイデンティティを構築することができずに母国へ戻り、自分自身の民族性を再認識することによりアイデンティティを築いていく様は、この時代の「女性移民文学」の特徴の一つである⁴。

その後、同じくベトナム出身のケベックの移民作家、キム・チュイが作品を発表した。チュイは、サイゴンで生まれた後、「ボートピープル」としてマレーシアの難民キャンプで過ごし、ケベックに移民した。ケベックの大学で学び、様々な職業を経験した後、2009年に最初の作品『小川』を発表した。この作品では、ベトナムで過ごした幼少期や、移民として生活したモントリオールでの生活の様々な経験が、回想録として綴られる。同作は、2009年のフランスの文学賞である RTL-LIRE 賞や、2010年のカナダ総督文学賞(フランス語小説部門)を受賞し、すでに世界17カ国で、スウェーデン語、イタリア語、ドイツ語、スペイン語、英語、日本語などに翻訳、出版されている。2012年に出版された英語版翻訳は、英語文学の文学賞として最も権威があるとされているブッカー賞の翻訳小説作品部門にノミネートされた。ここでは、「移民文学」や「女性文学」としての特徴よりも、ケベックの「間文化主義」の側面を読み取ることができるキム・チュイの作品について、さらに詳しく考察したい。

3.4. キム・チュイの『小川』と「間文化主義」

キム・チュイの処女作『小川』の特徴として、それぞれの章が短く、また長さもまちまちであることが挙げられる。それは、この作品が記憶の断片を綴ったものをつなぎ合わせることで、生まれたものであることを表す。つまり、この作品では、ベトナムに帰還することではなく、ケベックにとどまり記憶を再生することで、新たなアイデンティティを構築していく様が描かれる。そうして綴られるキム・チュイの記憶を通した語りは、これまでケベックやカナダの文学で描かれることのなかった、ボートピープルとして母国を脱出する際の過酷な状況や、マレーシアでの難民キャンプでの悲惨な生活、そしてケベックに移民し、ケベック人としてのアイデンティティを確立していく様を、克明に描くのである。先に挙げた中国系のイン・チェンや日系のアキ・シマザキなど、他のアジア系ケベック作家の初期作品は、アジア系移民の登場人物たちがケベックの社会や文化に対する「他者性」を持ってアイデンティティを形成していく様を描いていたが、キム・チュイの作品における登場人物たちがケベック人としてのアイデンティティを構築していく様は、「間文化主義」的な特徴と読み取れる。

3.4.1. アイデンティティと臭覚

例えば、キム・チュイの作品において、主人公の女性がケベック人としてのアイデンティティを持つに至る経緯は、その臭覚に対する感覚によって表現されている。臭覚はエスニック・アイデンティティを形成する際に大きな役割を果たすとされているが、この関係について、ローラ・マークス (Laura U. Marks) は、次のように述べている。

外国文化は臭覚によって劣等であるとされたり、エキゾチックなものとみなされがちである。それは普遍的で、理解しうることであるが、あらゆる民族は自分たちの世界の匂いを、他のどの匂いより好ましいと感じるのである。
(Marks, 2000, p.203)

キム・チュイの作品では、ケベックに到着した当初の時期における、ベトナム系の女性主人公の臭覚が、次のように描かれる。

ケベックにきた最初の数年は、私の服は、湿気と食べ物の匂いがした。なぜなら、洗濯の後、洗濯ものを部屋の中につるしていたからだ。毎晩、私が見るものは、チベットの祈祷の旗のように部屋を横切ってつるされる色とりどりの洗濯ものだった⁵。(Thúy, 2009, p.116)

それに対して、ケベック人のクラスメートの匂いについては、以下のように表現される。

何年もの間、クラスメートの服の柔軟剤の匂いを嗅いでいた私は、古着の袋をもらった時に、その匂いを嗅いで幸せを感じた。私はこの匂いに夢中だった。(Thúy, 2009, p.116)

やがて、この「ケベックの匂い」は、しばしケベックを離れ、ベトナムに滞在した際に、彼女にホームシックを感じさせるようになる。

ギヨームをハノイの空港に迎えに行った時に、ケベックの柔軟剤の匂いを嗅いで、思わず泣いてしまった。そうして私は、初めて私の「居場所」がケベックにあることを発見した。(…) 私は初めて「バウンス」⁶でホームシックになった。(Thúy, 2009, p.115)

エスニック・マイノリティ作家の作品では、母国の文化の匂いを通してアイデンティティを形成していく様がしばしば描かれており、特にその匂いとは、母国の食文化の匂いであることが少なくない。例えば、日系カナダ作家のヒロミ・ゴトー (Hiromi Goto) の作品『キノコの合唱』(*Chorus of Mushrooms*) では、日本の食事との関わりを通して、日系としてのアイデンティティを形成していく日系人少女の成長過程が描かれる。そうした食文化がエスニック・アイデンティティの形成過程で果たす役割について、ゴトーの主人公である日系二世の少女「ムラサキ」は、作品の中で次のように述べている。

食は異文化の表面的理解でしかない、と言う人がいる。実は、何も学んでいないと。決してそんなことはない。食こそ基本だ。食べることで、人間は成長するのだから、食こそ出発点なのだ。食べて、飲んで、そして、人は大声で笑ったり、叫んだりするのだから。(Goto, 1994, p.201)

ムラサキはまた、「白人」のカナダ人の友人に指摘され、自分がアジア系の匂いとされる「シイタケ」の匂いを持つことに気づく。こうして、日系カナダ人のムラサキは、白人のカナダ人との臭覚の対比から、日系人としてのエスニック・アイデンティティを再認識するようになっていく。

一方で、キム・チュイの作品では、アイデンティティの確立に大きく関与する食文化の匂いとは、母国のベトナムの匂いではなく、移民先のケベックのものである。例えば、語り手の女性の兄は、ベトナムの食習慣ではなく、ケベックで身に付けた北米の食習慣を好み、それはその後の彼の人生において、最初の「停泊地」を象徴する。

徐々に私たちは、牛乳をかけないライス・クリスピーを食べるようになった。兄たちは、トーストにジャムを載せて食べるようになった。下の兄は、毎朝二枚のトーストに、バターとイチゴジャムを塗って食べた。転勤した先のニューヨークでも、ニューデリーでも、モスクワでも、サイゴンでも。(…)この前、兄を訪れた時、あの染みのついたトースターが、棚の中にあるのに気づいた。それは、あちこち移動する時に、彼と一緒に持っていく唯一の物である。それがまるで、停泊地であるかのように。或いは、最初の停泊地の思い出として。(Thúy, 2009, p.114)

彼女の兄にとって、最初の停泊地、つまり自分のアイデンティティを再認識した場所とは、ケベックであったことが、このような食習慣から読み取ることができる。

3.4.2. 「間文化主義」と多文化への視点

ケベックに移民したエスニック・マイノリティたちがケベック人としてのアイデンティティを再構成する際の背景には、「間文化主義」という政治理念が目指す「フランス系文化の共有」、つまり、移民作家たちのいう「ケベックの人々の異文化に対する寛大さ」(村上, 1999, p.17)があるといえる⁷。

例えば、ケベックでは、日系作家であるアキ・シマザキの作品は、フランス語を母国語とする作家とは異なる独特の文体によって、「日本文化とフランス系カナダ文化の間に新たな文学を生み出した」(Hince, 1999, p. D6)として、高く評価される⁸。チュイの作品では、こうしたケベックの人々の「異

文化に対する寛大さ」は、ベトナム系の女性主人公がケベックに到着した当初に抱いていた印象について語る場面に描かれる。

その間のグランビー⁹は、地上の楽園だった。難民キャンプにいた時と同じくらいたくさんの虫さされができていたにもかかわらず、この世でこれほど素晴らしい場所は、想像することができなかった。(Thúy, 2009, p.35)

また、彼女がケベックに移民し、様々な経験をしていく際に、彼女がケベックの文化に馴染むことを常に助ける様々なケベック人たちの姿が、作品全体を通して描かれる。その過程で語り手の女性は、ケベック人たちの姿を「母」のようであり (Thúy, 2009, p.19)、また「天使のようであった」(Thúy, 2009, p.32) と表現する。

この作品の最後で、語り手「私」は、ケベックの自然を描写する。その語りの中に読み取ることができるベトナム系移民女性の視点とは、他者としてそのエキゾティックな美しさを愛でるものではなく、ケベックの人々が共に生き慈しむ自然に対する視点である。

その国では、牡丹の香りは、もはや単なる匂いではなく成熟を意味し、秋の楓の赤い葉は単なる色づきではなく感謝を意味し、一つの国はもはやある場所ではなく、揺籠となる。(…) そこでは、手を広げることは、単なる動作ではなく、愛情の表現でしかない。眠りに落ちる時、目を覚ます時、日々の生活の中で、繰り返されているように。(Thúy, 2009, p.142-143)

この作品では、ケベック社会の一員として、またケベック文化の担い手の一人として受け入れられたアジア系ケベック人の姿が描かれる。これは、近年見られるケベック文化の一側面である。こうして、ケベック元来のフランス系文化と移民文化が融合することによって生まれたケベック文化は、英系カナダ文学ともフランスの移民文学とも異なる特徴を持った文学空間をケベック文学に創り出すのである。

5. おわりに

現代ケベック文学では、アジアの様々な地域出身の移民作家の作品が現れ、それぞれがケベックだけでなく、カナダ内外で高い評価を得ている。これら

の作品は、1980年代以前にはケベック文学に見られなかった文化を背景として描かれており、ケベック社会の移民に対する態度の変遷を克明に描くことで、移民たちのもつ価値観をケベック文学に提示してきたといえる。この価値観は、カナダ連邦の「多文化主義」とは一線を画し、それぞれの「民族性」を保持しながら、ケベック文化を創り出そうとするケベック独自の「間文化主義」という政治理念の登場と密接に関連する文学的特徴であるといえるであろう。そして、移民たちの文化と価値観を共有することで作り出されるケベックの文学は、フランス系文化とエスニック・マイノリティ文化の融合した多彩な文化空間を生み出し続けているのである。

(やまで ゆうこ 明治大学兼任講師)

注

- 1 2000年以降に英語で出版されたベトナム系アメリカ文学の代表的な小説作品としては、lê thi diem thúy, *The Gangster We are Looking For* (2003); Monique Truong, *The Book of Salt* (2003); Dao Strom, *Grass Roof* (2003); Aimee Phan, *We Should Never Meet* (2004); Samantha Lê, *Little Sister Left Behind* (2007); Lac Su, *I Love You Are For White People* (2009) などがある。
- 2 Bouchard, Gérard, et al., « Après la commission Bouchard-Taylor: Relancer le débat sur l'interculturalisme » より引用したものを翻訳。なお、ブッシュャール、テイラー共著、竹中豊、飯笹佐代子、矢頭典枝訳『多文化社会ケベックの挑戦』(明石書店、2011年)にも、同氏らによる「間文化主義」の定義が引用されている(同訳著 p.76-77)
- 3 ロバンは、フランス系や英系でない移民作家たちは、「外国人とされながらも、ケベックの文化を作り出している」とし、このような移民作家たちを「ネオ(新)・ケベック人」と呼ぶ。それは、彼らが単に「新しい」というだけでなく「彼らの作品の持つ母国の文化やその記憶、多様性が、新たな創造性をもたらすような人々のことを指す」としている。(Robin, « Sortir de l'ethnicité », p.27)
- 4 例えば、日系カナダ人作家であるケリー・サカモト(Kerri Sakamoto)の作品『一億の魂』(*One Hundred Million Hearts*, 2003)では、日系三世の女性主人公がアイデンティティの拠り所を求めて日本へ旅立った後、日本人としてではなく、日系カナダ人としての自分自身を見出し、新たなアイデンティティを構築していくさまが描かれる。

- 5 本論考におけるキム・チュイの作品の引用箇所には、キム・チュイ著、山出裕子訳『小川』（彩流社、2012年）の翻訳を参照する。
- 6 「バウンス」(Bounce) は、カナダで広く使われる柔軟剤の名称。
- 7 アキ・シマザキは『日加タイムス』のインタビューにおいて、フランス語で作品を書き始めた経緯について、ケベックの人々の寛大さに後押しされたことを語っている。(村上侑子「インタビュー、アキ・シマザキ」『日加タイムス』(1999年6月25日): p. 16-17)
- 8 ダビッド・ヒンス (David Hince) は、ケベックの有力新聞 *Le Devoir* の書評で、アキ・シマザキの文体を「俳句のようにリズムカルな文体」と評した。(David Hince, *Le Devoir* (le 11 avril, 1999) : p. D6)
- 9 「グランビー」(Granby) はケベック州東部にある都市の名称。

参考文献

- Bach Mai. (1985) *D'ivoire et d'opium*. Sherbrook: Éditions Naaman.
- . (2009) *Hier encore Saigon*. Paris: L'Harmattan.
- Bhabha, Homi K. (1996) *The Location of Culture*. London: Routledge.
- Bouchard, Gérard, et al. (2011) « Après la commission Bouchard-Taylor: Relancer le débat sur l'interculturalisme ». *Le Devoir* (le 2 mars).
- ブシャール、ジェラルド、チャールズ・テイラー著 (2011)『多文化社会ケベックの挑戦』竹中豊、飯笹佐代子、矢頭典枝訳、明石書店。
- Chen, Ying. (1992) *La mémoire de l'eau*. Paris: Babel.
- . (1993) *Les lettres chinoises*. Paris: Babel.
- . (1995) *L'ingratitude*. Montréal: Leméac/Actes Sud.
- Connell, Liam, and Nicky Marsh, eds. (2011) *Literature and Globalization: A Reader*. London: Routledge.
- Goto, Hiromi. (1994) *Chorus of Mushrooms*. Calgary: NeWest Press.
- Hince, David. (1999) « Troublantes confessions: Des débuts au delà de toute espérance ». *Le Devoir* (le 11 avril) , p.D6.
- Kao, Lan. (1998) *Monkey Bridge*. New York: Penguin.
- Kim, Elaine. (1984) *Asian American Literature: An Introduction to the Writings and Their Social Context*. Philadelphia: Temple University Press.
- Kristeva, Julia. (1969) *Semeiotike: Recherches pour une sémanalyse*. Paris: Seuil.
- Lê, Linda. (2001) *Les Trois Parques*. Paris: Bourgois.
- . (2010) *Cronos*. Paris: Bourgois.
- Lefèvre, Kim. (2008) *Metisse blanche suivi de Retour à la saison des pluies*. Paris: Éditions

- Phébus.
- . (2007) *Moi, Marina la Malinche*. Paris: Éditions Phébus.
- Marks, Laura U. (2000) *The Skin of the Film: Intercultural Cinema, Embodiment and the Senses*. Durham: Duke UP.
- Moura, Jean-Marc. (1999) *Littératures francophones et théorie postcoloniale*. Paris: PUF.
- 村上侑子 (1999) 「インタビュー、アキ・シマザキ」『日加タイムス』(6月25日): p.16-17.
- Nguyen, Nathalie Huynh Chau. (2003) *Vietnamese Voices: Gender and Cultural Identity in the Vietnamese Francophone Novel*. DeKalb, IL: Northern Illinois University.
- Ravi, Srilata. (2002) « Revisiting Vietnam, Locating Home in Kim Lefèvre's *Retour à la saison des pluies* ». *International Journal for French Studies* 5-1(2002): p.39-46.
- Robin, Régine. (1992) « Sortir de l'ethnicité ». *Métamorphoses d'une utopie*. Eds. Jean-Michel Lacroix et Fulvio Caccia. Paris: Presses de La Sorbonne nouvelle / Éditions Triptyque.
- Sa, Shan. (2000) *Porte de la Paix céleste*. Paris: Gallimard.
- . (2003) *La Joueuse de go*. Paris: Gallimard.
- Sakamoto, Kerri. (2003) *One Hundred Million Hearts*. Toronto: A. Knopf Canada.
- Selao, Ching. (2011) *Le roman vietnamien francophone: Orientalisme, occidentalisme et hybridité*. Montréal: Les presses de l'Université de Montréal.
- Shimazaki, Aki. (1999) *Tsubaki*. Montréal/Paris : Leméac/Actes Sud.
- . (2001) *Tsubame*. Montréal/Paris : Leméac/Actes Sud.
- . (2004) *Hotaru*. Montréal/Paris : Leméac/Actes Sud.
- Thúy, Kim. (2009) *Ru*. Montréal: Éditions Libre Expression.
- チュイ、キム (2012) 『小川』山出裕子訳、彩流社。
- Thuy Pelaud, Isabelle. (2011) *This is all i choose to tell: History and Hybridity in Vietnamese American Literature*. Philadelphia: Temple University Press.
- Tran, Dan, eds. (1995) *Once upon a Dream...: The Vietnamese-American Experience*. Riverside, NJ: Andrews Mcmeel Publishers.
- 植木照代監修 (2011) 『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』世界思想社。
- Yeager, Jack A. (1987) *The Vietnamese Novel in French: A Literary Response to Colonialism*. Hanover: University Press of New England.

謝辞：本稿は「2011年度日本ケベック学会留学・研究助成金」の助成を受け行った研究の成果をまとめたものである。この場を借りて関係各位に感謝申し上げたい。